

eラーニングで学ぶ社会人学生の初年次教育科目への要望および 学生生活の状況

Requests for Study Skills Content and Actual Conditions of Student Life
of Adult Students Studying on e-Learning Course

石川 奈保子*
Naoko Ishikawa*

向後 千春**
Chiharu Kogo**

早稲田大学大学院人間科学研究科*

早稲田大学人間科学学術院**

Graduate School of Human Sciences, Waseda University*

Faculty of Human Sciences, Waseda University**

〈あらまし〉 eラーニングで学ぶ社会人学生が初年次教育科目に求めていること、および、学生生活の状況と大学への要望について検討した。この結果、次のことが明らかになった。(1)初年次教育科目で学生が役立ったと感じた内容は、レポートの書き方であった。(2)学生同士の情報のやり取りは、大学のシステムではなく、SNSと大学公認サークルに依存している。(3)大学は、社会人という特質を考慮して学習と仕事をよりうまく両立できるための体制を作っていくことが必要である。

〈キーワード〉 eラーニング 社会人学生 スタディスキル 初年次教育 導入教育

1. 序論

1.1. 背景

この10年ほどの間に、eラーニング制の通信教育課程を設置する大学・大学院が増加している。eラーニング制の通信教育課程では、学位修得に必要な124単位全ての科目について、自宅で受講し試験を受けられる。これにより、社会人学生が学位を修得しやすい制度が整えられつつある。

eラーニングには「いつでもどこでも学べる」という利点がある一方で、孤独感、学生同士のコミュニケーションの難しさなどが指摘されている（野嶋ほか 2005）。

これらの問題を軽減するための試みとして、初年次教育科目の効果について検討されている。eラーニングで学ぶ社会人学生を対象に、受講任意の初年次教育科目を開講したところ、課題を実施した学生は、その後の学生生活において、学習、コミュニケーション、家族や職場の人の理解についての自信が上昇した（石川・向後 2011）。初年次教育科目でSNS（Social Networking Service）を紹介することで、SNS内での学生同士の交流が促進され、孤独感が軽減されたり他の学生とコミュニケーションが取れるようになったりする効果も期待できるであろう。しかし、学生同士の交流が盛んになった

結果、また別の問題点が発生しているおそれもある。

1.2. 問題提起

eラーニング制の通信教育課程において、社会人学生が学習と仕事をうまく両立できるように支援することは、大学にとって重要な責務である。しかし、eラーニングで学ぶ社会人学生の学生生活の現状や、学生生活への適応の状況について検討する研究はまだ少ない。

では、eラーニングで学ぶ社会人学生は、学生生活についてどのようなことを不安に感じているのだろうか。また、大学に対してどのようなサポートを求めているのだろうか。

本研究では、eラーニングで学ぶ社会人学生が初年次教育科目に求めていること、および、学生生活の状況について検討する。

2. 授業

2.1. 授業の概要

X大学通信教育課程の新入生を対象に、初年次教育科目「スタディスキル」を配信した。

コンテンツの内容は、「0.オリエンテーション」「1.情報スキル」「2.大学での学び方」「3.文献検索～レジユメの作り方」「4.議論の構造：レポートのエンジン」「5.レポートの書き方」「6.プレゼンテーション」であり、各コンテンツの長さは10～20分程度であった。

配信は、入学前（2011年2月1日から3月31日まで）、春学期（同年5月9日から8月3日まで）、夏期休暇中（同年8月4日から9月25日まで）の3期に分けて行った。

各回の配信期間は2週間ずつで、各回の最後に単元の内容を実習する「ホームワーク」が提示された。「ホームワーク」の提出は任意であり、提出後、教育コーチからフィードバックがあった。

この科目の受講は学生の任意であり、卒業単位には算入されなかった。

3. 方法

X大学通信教育課程の2011年度入学生167名を対象に、LMS（Learning Management System）のお知らせ機能およびメールで、インタビューの協力者を募集した。うち、7名（男性2名、女性5名；平均年齢38.71歳、 $SD=12.87$ ）の協力を得た。協力者には、2000円相当の謝礼が与えられることがあらかじめ提示されていた。協力者の性別・年齢・職業は表1に示した。

表1 協力者の性別、年齢、職業

	性別	年齢	職業		性別	年齢	職業
A	男性	19	アルバイト	E	女性	19	会社員
B	女性	42	フリーランス	F	女性	51	自営業
C	女性	37	会社員	G	女性	47	公務員
D	男性	42	会社員				

調査は、協力者全員が同じ日時・場所に集まり、質問に対して自由に話し合ってもらうフォーカス・グループ・インタビューの手法で行われた。調査日は2011年11月5日、場所はX大学の講義室であった。所要時間は約3時間であった。インタビュー中、協力者の了承を得てICレコーダーに記録した。

質問は、大別すると(1)初年次教育科目に対する感想や要望、(2)学習環境と周囲の人の理解・協力、(3)通信教育課程内での交友関係、(4)大学への要望の4点についてであった。各質問項目は、表2に示した。

4. 結果

収集したデータは、内容ごとに分類した。

表2 質問項目

I	初年次教育科目に対する感想・要望
i	最も役に立った単元はどれか
ii	初年次教育科目に取り入れてほしい内容
iii	初年次教育科目の体制（単位の有無・配信期間など）
II	学習環境と周囲の人の理解・協力
i	1週間の学習の流れ
ii	学習していて困った経験
iii	家族や友人の理解・協力
iv	職場の人の理解・協力
III	通信教育課程内での交友関係
i	SNSの活用
ii	サークルへの参加
iii	通信教育課程のコミュニティへの所属感
IV	大学への要望
i	大学に求めるサポート

4.1. 初年次教育科目に対する感想・要望

4.1.1. 最も役に立った単元

初年次教育科目で取り上げられた単元のうち、最も役立った単元として、「3.文献検索～レジュメの作り方」（1人）、「4.議論の構造：レポートのエンジン」（3人）、および、「4.議論の構造：レポートのエンジン」と「5.レポートの書き方」がひと続きで役立った（3人）という意見が出た。

「3.文献検索～レジュメの書き方」が役立った理由は、以前より効率的に文献を検索できるようになったためであった。

「4.議論の構造：レポートのエンジン」が役立った理由は、トウールミンの三角ロジックを学んだことで、議論の最終的な結論の見いだし方を学べたことと、大学でのレポートの書き方を知ることができたことが挙げられた。

また、「4.議論の構造：レポートのエンジン」と「5.レポートの書き方」がひと続きで役立った理由として、すっきりした文章を書けるようになったこと、学んだことを1つにまとめる方法を学べたこと、課題作成中に自分の文章の内容を検証できるようになったことが挙げられた。

4.1.2. 取り上げてほしい内容

初年次教育科目で今後取り上げてほしい内容として、「パソコン操作」「メールの作法」

「BBSでの議論の練習」「正しい日本語の使い方」「プレゼンテーション」が挙げられた。

「パソコン操作」については、「ワープロソフトや表計算ソフトの基本的な操作方法」と「クラウド」が挙げられた。「ワープロソフトや表計算ソフトの基本的な操作方法」は、入学時にはワープロソフトや表計算ソフトの基本的な操作方法がわからずに困っている新入生もいたためという理由であった。「クラウド」は、インターネットの新しい技術であり、今後使うことが増えると予想するためという理由であった。

「メールの作法」は、メールの最後の署名のしかたなどを知りたいという意見であった。

「BBSでの議論の練習」については、BBS上での議論を義務づけている科目があり、初めてのときにやり方がわからず、受講生たちが何もできなかったという経験をしたためという理由であった。

「正しい日本語の使い方」については、「レポートにおける接続詞」と「BBSで使う敬語」を扱ってほしいという意見があった。

「プレゼンテーション」については、現在よりも詳しい内容を取り上げてほしい、という意見であった。

4.1.3. 初年次教育科目の配信体制

初年次教育科目の体制について、「配信方法」「扱っている内容の量」「必修科目との内容の重複」「必修か任意か」「受講したことで役立つ事柄」に関する意見が出た。

「配信方法」に関しては、「開講回数」と「視聴履歴」に関する意見が出た。「開講回数」については、春学期中にやりきれなかったホームワークを夏期休暇中に提出することができてよかったという意見であった。「視聴履歴」については、入学前の視聴履歴が入学後に確認できなくなったことが不便であったという意見であった。

「扱っている内容の量」に関しては、課題まで取り組むと負担は大きいため、これ以上内容が増えると多すぎるという意見であった。

「必修科目との内容の重複」に関しては、「文献検索とレポートの書き方が必修科目と内容が重複していて、時間の浪費という感じがあった」という意見に対し、「その必修科目を秋学期に受講する者にとっては、初年次教育科目で学んでいてよかった」というコメントがあった。

「必修か任意か」に関しては、「必修がいい」という意見と、「任意がいい」という意見が1人ずつから出た。「必修がいい」という意見は、基本的なパソコン操作についての内容も含めて必修化してほしいという意見であった。一方、「任意がいい」という意見は、初年次教育科目は必修科目を学ぶための科目という位置づけであり、受講するかどうかや受講できるかどうかは学生に任せられているところがいい、という理由であった。

「受講したことで役立つ事柄」については、「入学前に受講したことで、本格的に講義が始まる前に学習のリズムが作れた」、「任意科目であるにも関わらずホームワークまでやり切ったことで、自信がついた」というコメントを得た。

4.2. 学習環境と周囲の人の協力

4.2.1. 1週間の学習の流れ

X大学通信教育課程では、コンテンツの配信は1週間ごとに行われる。月曜日の0:00から日曜日の23:59までを1週分として区切っている。

そこで、履修科目の学習をどのように進めているかについて、1週間の流れを尋ねた。「月火、月火水、または、月火水木でコンテンツを視聴し、残りの平日で課題に取り組む」、「月曜から金曜までで、1日2科目を目安に視聴と課題をこなす」というコメントを得た。

また、「目標は平日中に学習を終えることであるが、土日も課題をやっていることが多い」というコメントもあった。

4.2.2. 学習していて困った経験

学習をしていて困った経験として、「複数科目の課題提出が同時期だったこと」と「教員からの高度な要求」が挙げられた。

「複数科目の課題提出が同時期だったこと」については、「数日間、仕事以外の時間のほとんどを大学の勉強に費やさなければならず、不規則な生活が続いてつらい思いをした」、「仕事の宿題と大学の課題とスクーリングが重なったとき、夜中に胸に強い痛みを感じたことがトラウマになった」というコメントがあった。

「教員からの高度な要求」について、「データに基づいて考えをまとめる課題が毎週出され、学期中ずっと切迫感・負担感があった」、「中間テストと海外出張が重なったため、受験

をずらしてもらえよう交渉したが認められなかった」というコメントであった。

4.2.3. 家族や友人の理解・協力

「親」「配偶者」「子ども」「友人」からの理解・協力についてのコメントがあった。

「親の理解・協力」については、「大学で学ぶ理由を理解し、金銭的、時間的な協力をしてくれている」、「理解してくれているが、以前より一緒に過ごす時間が少なくなってしまう」というコメントであった。

「配偶者の理解・協力」については、「平日はそれぞれのペースで過ごしている」、「学費は負担であるはずであるが、理解を示してくれている」、「家事を分担している」というコメントであった。また、「配偶者が自宅にいるときは大学のことをしないようにしている」というコメントもあった。

「子どもの理解・協力」については、「親が勉強していることに疑問をもっているため、子どもたちには学習を中断されることが多い」というコメントであった。

「友人の理解・協力」については、「大学での勉強に時間を取られ、友人に会う機会が減った。お互い寂しい思いをしていると思う」というコメントであった。

4.2.4. 職場の人の理解・協力

大学で学んでいることを、職場の人に知らせている協力者（5人）と知らせていない協力者（2人）がいた。

知らせている場合でも、「直属の上司」「直属の上司と親しい同僚」と相手を限っていた。直属の上司には、勤務時間の調整や、大学関係で不測の事態が発生したときのために知らせている、という理由であった。上司の理解・協力については、「大学に関することで早く職場を出たいとき、嫌な顔をせずに送り出してくれる」、「『勉強第一にしながら働いてほしい』と言ってもらっている」というコメントがあった。また、親しい同僚の理解・協力については、「勉強した内容や愚痴を聞いてもらったり、励ましてもらったりしている」というコメントがあった。

知らせていない理由は、「勤務時間がある程度自分に裁量をまかされているため、上司に協力を求める必要がない」、「大学での勉強は個人的なことであるため、あえて他人には言っ

ていない」ということであった。

4.3. 通信教育課程内での交友関係

4.3.1. SNSの利用

X大学通信教育課程内での交流にSNSを利用しているかについて、利用している協力者は5人、利用していない協力者は2人いた。

利用している場合、「うまく活用している」というコメントと「悩みがある」というコメントが出た。うまく活用している協力者からは、「情報を得たり発信したりするために利用している」、「SNSに書いたことが会ったときの話のきっかけになる」、「SNSに書いたことが実際に会うきっかけになった」というコメントを得た。また、SNSを利用する中での悩みについては、「SNS上で孤立したら、大学のコミュニティでうまくやっていくことが難しいと感じた」、「情報を得るばかりで、自分から発信していないので申し訳なく感じている」、「友人を作る目的ではなく情報を得るために利用し始めたが、最初のうちは負担であった」というコメントがあった。

一方、SNSを利用していない理由は、「実際に会ったことのある人でないとやりとりできない」、「SNSを利用し始めるきっかけがなかった」ということであった。また、「通信教育課程公式の掲示板ではほとんど情報が入らない」というコメントもあった。

4.3.2. サークル活動

X大学通信教育課程公認のサークルに加入しているかどうかについて、全員が加入していると答えた。しかし、なんらかの活動に参加したことがあるという協力者は3人であった。

サークルについて、「懇親会」「情報提供」に関するコメントを得た。「懇親会」については、「地方の支部の活動が盛んで、懇親会がよく行われる」というコメントであった。「情報提供」については、「春学期、秋学期の科目登録の前の『科目検討会』がとても役に立った」というコメントであった。

4.3.3. 通信教育課程への所属感

通信教育課程のコミュニティへの所属感があるかどうかについて尋ねたところ、「所属感がある」と答えた協力者は7人中6人であった。

所属感がある理由として、「インターネット上での情報のやりとりを楽しむことができているから」、「希望通り入学できたから」、「学生証があることが嬉しい」というコメントがあった。

一方、所属感がないと答えた協力者からは、「大学では学びたいことを学ぶだけの場所であるから。また、他の場所への所属感の方が大きいから」というコメントを得た。

4.4. 大学への要望

大学への要望について尋ねたところ、「授業」「事務」に関するコメントがあった。

4.4.1. 授業

授業に関しては、「講義内容」「講義資料」「課題」「配信方法」「スクーリング」「受講科目」についての意見が出た。

「講義内容」については、「何年も同じコンテンツを配信するのはやめてほしい」、「最新の情報を配信してほしい」、「講義時間に見合った内容にしてほしい」という意見であった。

「講義資料」については、「スライド資料をダウンロードできるようにしてほしい」、「資料とコンテンツ内の言及との相違点があったら知らせてほしい」という意見であった。

「課題」については、「提出した課題へのフィードバックがほしい」という意見であった。

「配信方法」については、「1週間ではなく、2～3週間はコンテンツの視聴や課題提出をできるようにしてほしい」、「スタジオで収録したビデオではなく、通学生の教室授業も配信してほしい」という意見であった。

「スクーリング」については、「eラーニングの通信教育課程なのだから、週1回の通学を要求する科目をなくしてほしい」という意見であった。

「受講科目」については、「英語以外の外国語科目も受講できるようにしてほしい」という意見であった。

4.4.2. 事務

事務に関しては、「情報公開」「サービス」についての意見が出た。

「情報公開」については、「ある科目を履修する際の前提科目がわかるようにしてほしい」

、「ゼミへの所属までの段取りを教えてほしい」という意見であった。

「サービス」に関しては、「問い合わせに対する回答を早くしてほしい」「毎年質問されることは、FAQなどに挙げておいてほしい」という意見であった。

5. 考察

5.1. 初年次教育科目に対する要望

初年次教育科目の内容として、レポートの書き方を取り上げることが必須であることが示唆された。レポートの出来具合は成績評価に直結する。大学でのレポートの書き方は、中等教育や職場でのレポートの書き方とは異なる。レポートがただの感想文になってしまう学生もいるであろう。すなわち、教員が学生に求めるレポートとこれまでに学生が書いてきたレポートにはずれがあるため、訓練が必要であろう。

また、今後の初年次教育科目にパソコンの基本操作を含むかどうかについて、検討した方がよいと考えられる。eラーニングでは、授業を受けたり課題を作成したりするために、パソコンの基本操作ができることは必須である。しかし、新入生のすべてがパソコンを使った経験があるという訳ではない。よって、LMSやワープロソフトの操作方法など、受講に最低限必要な操作を学べるようにしてもいいであろう。

配信体制については、視聴履歴の公開方法について改善が必要である。入学前は仮のIDでLMSにログインしていたため、入学後に視聴履歴が確認できなくなってしまった。同一の内容である以上、年度内の連続性は考慮すべきであろう。

5.2. よりよい学習環境の確保

X大学通信教育課程の学生の多くは社会人であることから、社会人が今よりも学びやすくなるための体制をもう一度検討すべきである。

1つ目は、1回分の講義を2～3週にわたって学習できるようにすることである。急な出張や繁忙期、家族の入院など突発的な出来事のために、思い通りに学習時間を確保できないことはある。2～3週の猶予があれば状況が変わり、学習を滞らせることを防げるであろう。とはいえ、学習可能期間が延びれば、学習を先延ばしてしまうおそれもある。期間が長過ぎないようにする工夫も必要であろう。

2つ目は、期末課題の提出期限を同時期に集中させないようにすることである。学期末が繁忙期であったり、普段から学習時間の確保に苦慮したりしている場合、過剰な負荷がかかる。その結果、十分な睡眠が取れなかったり体調を崩したりする学生もいる。こういった事態は、大学側の工夫で避けられる。例えば、教員にシラバスへの課題提出期限の明記をお願いすることで、学生は予定を立てながら科目を選択することができる。また、講義の配信終了後に課題の期限を設けられるようにすることで、コンテンツの視聴・課題と期末課題を同時進行で取り組まずにすむ。

X大学通信教育課程が設置されて数年が経ち、学生側にも学習時間を確保するノウハウがある。しかし、それでも対処できない事態にもできるだけ対処できるように、大学側が体制を変えていくことも必要であろう。

5.3. 交友関係を広げるためのサポート

大学が、学生の交友関係を広げるためのサポートを積極的にすべきである。具体的には、LMS内での交流を活発する、大学主催の懇親会を開催するといった手段がある。X大学通信教育課程の学生は、主にSNSと大学公認サークルで交流を行っている。これらは、学友と知り合ったり、学習の進め方や大学生活についての情報交換したりする場として役立っている。また、「X大学通信教育課程の学生である」という所属感を支えている。

しかし、一方で、これらを活用できない学生もおり、情報量の格差が起こっているようである。SNSはアカウント登録をしなければ閲覧できないため、SNSの利用に戸惑いを感じる学生は利用できない。また、サークルは、加入すれば人間関係などの負担が増えるために躊躇する学生もいるであろう。他の学生との交流に重きを置いていない学生にとっては、SNSもサークルも入っていくにはハードルが高く、その結果、大学に関する情報がほとんど入ってこないという事態になっていることが推測される。

通学制で部活やサークルなど大学が関与しない学生同士の交流方法があるのと同様に、通信教育課程でも大学が関与しない交流方法は必要であろう。しかし、情報提供に関して大学が直接関与しないSNSやサークルに依存することは、大学としては改善すべき点であろう。

5.4. 大学が検討すべきこと

教員も大学職員も、「学生相手である」という考えを改める必要がある。学生の多くが社会人であり、自分で学費を払っている。よって、「大学から提供されているサービスに、学費に見合うだけの価値があるかどうか」という視点を持っている。このことから、教員は、講義の配信方法や内容、課題の出し方について検討すべきであろう。また、大学職員は、これまでに蓄積したノウハウを整理し、予想できる混乱は防ぐ取り組みが必要であろう。

6. 結論

eラーニングで学ぶ社会人学生が初年次教育科目に求めていること、および、学生生活の状況と大学への要望について検討した。この結果、次のことが明らかになった。

(1)初年次教育科目で学生が役立ったと感じた内容は、レポートの書き方であった。

(2)学生同士の情報のやり取りは、大学のシステムではなく、SNSと大学公認サークルに依存している。

(3)大学は、社会人という特質を考慮して学習と仕事をよりうまく両立できるための体制を作っていくことが必要である。

謝辞

本研究は、平成22～26年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)22500942「成人教育学の視点に基づいた生涯学習のためのeラーニングの構築と実践」による支援を受けています。

引用文献

石川奈保子，向後千春（2011）eラーニングで学ぶ社会人学生のスタディスキル科目受講前後における学生生活に対する自信の変化。日本教育工学会研究報告集，JSET11-5，pp.17-24

野嶋栄一郎，松居辰則，浅田匡，西村昭治，菊池英明，向後千春（2005）スクールモデルに基づくインターネット大学の実践と評価—早稲田大学eスクールの2年間の実践と多面的評価—。工学・工業教育研究講演会講演論文集，平成17年度，pp.418-419